

# 日本庭園の変遷と中世の「会所」

庭園文化研究分科会 宇野 真一

## 1. 日本庭園の変遷

### 1-1 庭≠緑地空間、園=理想郷

庭(ニワ)と園(ソノ)はよく似た意味で使われる字だが、元々の意味は全く異なる。庭(ニワ)は“广”に“延”と書かれる。“延”は延べる(ノベル)と訓むことから明らかに平らな場所・特別に平らにした場所を意味し、“广”は建物を表す。

それを合体させた“庭”は建物に囲まれた、あるいは建物の周囲にある平らな場所を指し示している。古代、庭(ニワ)と呼ばれたのは共同作業、神降ろし、集会・政(マツリゴト)を行うために平らに整えられた場所のこと、その名残は、今でも農家の土間をニワと呼ぶ事、朝廷・法廷の“廷”的字、斎庭(ユニワ)・審神者(サニワ)といった言葉に残されている。

沖縄の御嶽(ウタキ)、首里城中庭、皇居宮殿東庭(一般参賀)、時代劇で見るお白州、神社境内の玉砂利等々、すべて庭(ニワ)である。

園(ソノ)は果樹や草木が植えられ囲まれたところを意味し、イメージとしては果樹園に近いかもしれないが、緑地空間であることには間違いない。

日本庭園は、大陸・朝鮮半島からの帰化人がもたらした文化装置を日本風にアレンジしながら発展している。「日本書記」には、路子工が須弥山・吳橋を作った話(612年)や馬子の邸宅に庭園があり“島大臣”と呼ばれていた話(626年)が残されており、7世紀初頭までは遡ることが確実である。顯宗天皇の治世(485~487年)に曲水宴が行わされたという記録もあるそうで、その場合、5世紀末にはすでに遣水があったことの傍証となる。

平安時代になると武陵桃源、神仙思想、ついで浄土信仰に基づいた庭園が作られていく。要素のみを列挙すれば、遣水、須弥山、桃花(桃源郷)、蓬萊山、苑池、三尊石などがあるが、これらの庭園に共通するコンセプトは、それぞれの思想が描く理想郷を再現することである。

### 1-2 日本的変容(写実そして写意)

大陸オリジナルの手法やデザインであることが絶対視されステータスでもあった庭園だが、時代を経るにつれて日本の変容を見せはじめた。具体には池を構成する直線護岸が州浜(緩傾斜護岸)に代わり、桃花よりも梅花、さらには桜花

や松が多く用いられるようになり、鶴島・亀島などオリジナルには無い要素も加わっていく。日本庭園は大陸からもたらされた理想郷を自分たちにとってよりリアルな自然風景として再現するようになっていく。その風景のモデルとして名勝地が選ばれるわけだが、平安貴族にとっての名勝地とは歌枕の地でもある。

日本庭園は平安末期からおよそ500年の間で多様性を極め、江戸初期にはほぼ完成したとされる。その動きの中心にあったのが禅宗、特に臨済宗である。

平安末期には修行の一環として作庭を行う石立僧が現れる。深山幽谷を再現し悉有仏性という観点にたった作庭であり、それまでの自然景観・名勝地を再現するという写実性は後退して、写意・抽象の度合いが高まっていくようになる。ちなみに、深山幽谷の再現とは達磨大師などの修行地の再現であり、よく作庭を行った僧としては、無窓国師・古嶽宗旦・雪舟などが有名である。

室町時代になると庭園の維持管理を専門に担う作庭技術者=山水河原者が現れ、高い教養を身につけ作庭の才に特に秀でたものの中からは同朋衆となるものまで出てきた。

### 1-3 阿弥と宗

日本の伝統文化は中世にルーツをもつものが多く、その中世文化史を彩るクリエーター達は○阿弥、宗○という名前がよく見られる。

“阿弥”では、觀阿弥・世阿弥、能阿弥・芸阿弥・相阿弥、善阿弥、立阿弥、千阿弥、本阿弥光悦等々。一般的に阿弥号は時衆(時宗)の僧とされるが、ここに名前を挙げた人物の多くは、阿弥号の由来がよくわからない。

“宗”では、一休宗純・古樂宗旦・古徑宗陳、宗祇、今井宗久・津田宗久・千宗易・神屋宗湛等々。こちらは明解で概ね臨済宗の僧侶または得度僧である。

その多くは下賤の身と思われる“○阿弥”と僧侶・武士・豪商といったパワーエリートであった“宗○”が文化史に現れるこの時代、その両者を結びつけた舞台が「会所」である。「会所」についてはレポート後半で詳述する。

庭園史に戻る。日本庭園を構成する要素は、すべて中世(鎌倉・南北朝・室町・戦国時代)に出揃う。建築ではこの時代に書院造が完成する。書院とは座敷つまり接客空間のことで、いわゆる上座が主人または主客の位置となる。

そこからの視線を重視して構成された庭園が書院造庭園と呼ばれる。

この時代、部分的手法に過ぎなかった枯山水が独立した庭園様式となり、茶室とともに露地庭が設けられるようになった。今では日本庭園のアイコンともいえる蹲・石燈籠・鹿威し・飛石などは露地庭に用いられたのが最初で、それ以前

の庭には存在しない。日本庭園の主役はあくまで、池や流れと自然石の石組みでとされる。

#### 1-4 庭園の複合化・大衆化

江戸時代になると大名庭園が現れる。これは広大な敷地に多数の庭園手法を展開させた池泉回遊式の庭であり、その嚆矢といえるのが桂離宮庭園である。桂離宮庭園は書院（特に向月台）から眺める書院造庭園であり、池の周囲に茶室を設けた池泉回遊式庭園であり、その園路に露地庭の手法を用いた庭園でもある。その完成度の高さもあり、桂離宮庭園とそれにつづく修学院離宮庭園は大名庭園の成立に大きな影響を与えている。前述した蹲・燈籠などは、露地庭→桂離宮庭園→大名庭園→日本庭園一般へと拡がってきたのだ。



図1 桂離宮庭園（京都市）

江戸中期になると京都・江戸中心の庭園文化が地方にも浸透していく。その背景には参勤交代制度による中央↔地方の人・情報伝播、町民の経済力が向上し寺社詣で活発化したことなどが考えられる。

観光パンフレット（EX. 都林泉名勝図絵）、作庭マニュアル（EX. 築山庭造伝）も出版され、地方の豪商・有力寺社などが庭園を有するようになっていった。この時代、庭園は前栽（せんざい）、山水（せんずい・さんすいなど）、林泉（りんせん）等と呼ばれている。

### 1-5 景觀主義・藝術主義

江戸時代の作庭マニュアルには、○○の木は△△に植えるべきとか、□□には××がないといけないとか、真行草がとか記載されたものもあり、現在もなお一定の影響力を有している。一方、近代になると、マニュアルを安易に踏襲する風潮に対して景觀的手法や藝術性を重視した作庭家も生まれている。

現在に繋がる実績を残したという意味で、特に代表的な作庭家を挙げる。重森と中根は島根にも関りが深い。

小川治兵衛 1860～1933

山形有朋・無鄰庵、平安神宮神苑

自然主義、石を高くたてない、西洋庭園との繋がり、芝生、琵琶湖疎水

象徴主義からの脱却（ここでいう象徴主義とは仏教由来の石の意味）

飯田十基 1890～1977

等々力渓谷内の日本庭園、吉田五十八邸および吉田五十八（建築家）が設計した建物の庭

雑木の庭の創始者であり、住宅・オフィスビルに依らず、現在建築に付随する庭のプロトタイプを創出

重森三玲 1896～1975

東福寺方丈庭園、重森三玲庭園美術館（旧自邸）

昭和を代表する作庭家、庭園研究家であり、桃山時代のような力強い石組み、現代的な苔の扱いが特徴。永遠のモダン・モダン枯山水と称され熱狂的なファンも多い

中根金作 1917～1995

足立美術館庭園、大山公園内日本庭園

昭和の小堀遠州と称えられた作庭家。中世の庭園を手本とする

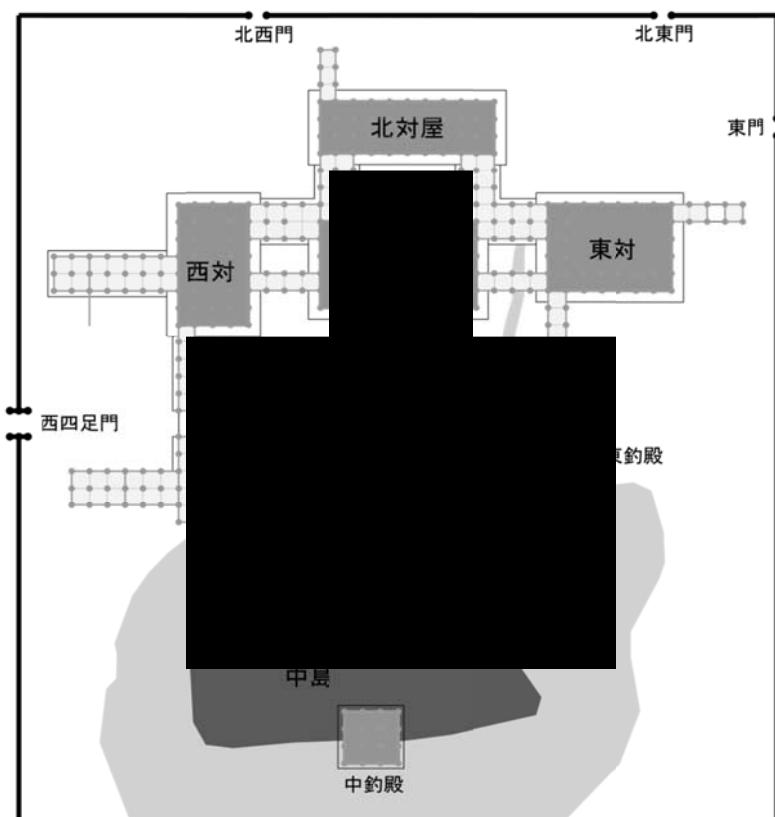
## 2. 中世の「会所」

### 2-1 寝殿造から書院造へ

寝殿造は平安時代から中世まで見られた貴族の住宅様式である。現存する建物は無いが、様式としては平等院鳳凰堂が近いとされ、母屋と庇、床板・濡れ縁、柱だけで構成されている。壁に囲まれた部屋はほとんどないため、その都度、御簾・几帳、屏風・衝立などで仕切を設ける。

機能的にフラットな空間ともいえるが、大まかなゾーニングは存在した。

正殿前には庭(ニワ)設けここが儀式や公的接客空間、正殿は執務空間、東対(の一部)が比較的私的な接客空間、北対屋がいわばプライベート空間である。池のあるスペースは厳密には南庭と呼ばれる。「作庭記」にも儀式空間としての庭(ニワ)を確保したうえで、その先に池を設けるよう書かれている。



2 寝殿造 平面図

鎌倉時代の将軍や上級武士の居宅は簡素化された寝殿造という表現を超えるものではなかったが、徐々に機能分化が建物レベルでも進み、従来、庭(ニワ)で行われてきた儀式の一部や公的接客の多くは室内で行われるようになっていく。中世に台頭してきた武士階級にとって、交渉や情報交換を目的とする公

的接客の重要性は高く、そこでは階級差を明示するとともに上位者の威厳を高める空間装飾も必要とされた。

すべての床が板張りだった寝殿造りでは、座るときの敷物が階級を表す。上位者はタタミでその厚さや縁（へり）の模様で更に細分化され、次いで薄縁、座、直（なにも敷かない）と続く。

(EX. お内裏様・お雛様が座っているタタミ、百人一首の絵札)

狭義の座は藁で編んだ縄を渦巻き状にしたもので座布団のルーツである。部屋全体にタタミを敷きつめると（座を敷きつけた部屋だから座敷）、それに代わる装置が必要となる。そこで、書院（本来は書斎の意味）の造作などを元に床の間が完成され、上座・下座といったルールも定められた。

寝殿造りの正殿が対面所・座敷として独立性を高めるのと同時に、私的接客空間やプライベート空間（常御所・小御所など）も独立していく。最終的には書院造として完成するが、その過渡期に出現したのが「会所」である。



身分が高い場合（タタミ十縁）



薄縁



座

## 2-2 「会所」・連歌・文化サロン

「会所」は建物として独立した私的接客空間である。前章で日本の伝統文化の多くは中世にルーツをもつと記述したが、その主舞台が「会所」である。

「会所」では、時にはハレの行事でも使われたが、基本的には私的・遊興的行事に用いられていた。この時代、盛んに行われていたのは闘茶や連歌である。

こういった行事ごとでは座敷飾りと呼ばれる空間演出も行われ、生花もここから派生している。同じく座敷飾りのひとつだった盆石は、枯山水庭園のミニチュアにしか見えない。文化的な洗練度をしめすことが自らの権威を高めることにもつながる場であった。

連歌では、その場限り、貴賤を問わず参加者が一座をつくったといわれており、事実、皇族をはじめ将軍・上級武士・僧侶・有力町人が一堂に会することも多かったようである。そのイベントプロデュースを担当したのが同朋衆であり、目利き＝高度な洗練された教養を持つものは、○阿弥と称する下賤の身であっても重く用いられるようになっていった。ここに、特權階級を中心とした文化・芸術サロンが誕生する。そのほかには闘茶も盛んにおこなわれていたようで、わび茶の創始者・村田珠光と大成者・千利休を繋ぐ武野紹鷗も連歌師をしていたといわれ、文化人ネットワークを生み出していたことは間違いない。

その意味では、戦国大名の茶道具・名物自慢にもつながると思う。

## 2-3 「会所」建築

「会所」建築の直接的モデルと考えられているのは有力寺院の方丈である。

本来、方はスクエア、丈は長さの単位で10尺、よって方丈とは10尺×10尺の空間のことだが（方丈記の方丈はこれで4畳半強）、のちに寺院の住職が生活する建物を指すようになる。モデルになったのは後者の方丈で、その中心は九間（このま）と呼ばれる3間×3間の部屋である。ここで参加者全員が一堂に会し、車座となるわけで、九間（この間）自体は何もない空間だが、そこに至る各部屋には様々な座敷飾りが置かれている。



図3 室町殿南会所 平面図



図4 東山殿会所 平面図